

Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO.11

The **PACIOLI SOCIETY JAPAN**

1998 . 05

パチョーリ簿記論翻訳書の探求

大東文化大学 片岡 泰彦

I 序

世界で最初に出版された簿記・会計に関する文献は、ルカ・パチョーリの「スムマ」(算術・幾何・比及び比例全書—Summa de Arithmetica, Gemetria, proportioni et proportionalita)である。このスムマは1494年にヴェネツィアで出版され、1523年にトスカーノで再版された。このスムマの第1部第9編・論文第11に世界で最初の複式簿記に関する論文—「計算及び記録に関する詳説(Particularis de Computis et Scripturis)」が加えられた。この論文を、我々は「パチョーリ簿記論」と呼ぶ。

このパチョーリ簿記論の思考は、16世紀以後全ヨーロッパ中に伝えられていった。まず、1543年にオランダのジャン・イムピン・クリストッフエル(Jan Ympyn Cristoffel)が、アントワープでオランダ語及びフランス語で、パチョーリ簿記論を基礎とする簿記書を出版した。そして、イムピンの英語版も1547年に出版された。

さらに、パチョーリ簿記論の思考を伝えるドイツ語による簿記書は、1549年にウォルフガング・シュヴァイケル(Wolfgang Schweicker)によって出版された。

ただし、「パチョーリ簿記論」そのものの翻訳は、19世紀に入ってから遂行された。まず、その幕は、1876年にエルンスト・イエーゲル(Ernst Ludwig Jäger)の著書「ルカス・パチョーリとサイモン・スティーヴン(Lucas Pacioli und Simon Stevin)」によって切って落とされた。

それから今日までの120年間に、筆者の知り得る限り、30冊の翻訳書が出版されたのである。すなわち、英語と日本語で各4冊、イタリア語とロシア語で各3冊、チェコ語、ドイツ語、中国語、オランダ語、スペイン語、フランス語で各2冊、ポーランド語、ルーマニア語、トルコ語、ポルトガル語各1冊ずつの計30冊である。

なぜ、このように多くの翻訳書が出版されたのであろうか。世界でも、このような短い専門の論文についての数多くの翻訳は、類を見ないように思われる。したがって、次にその翻訳書の多い理由についての私見を若干述べてみたい。

(1) まず第一に、パチョーリ簿記論が、世界中の会計組織に与えた影響の大きさがあげられる。

リトルトンが、名著『会計発達史—Accounting Evolution to 1900』の中で、パチョーリを近代会計学の父(The father of modern accounting)と称し、高く評価したことからも十分理解できるであろう。

う。

(2) 次にパチョーリの知名度である。ピエロ・デラ・フランチェスカ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、レオン・バッティスタ・アルベルティ、ドメニコ・ブラガディーノ、メロツォ・ダ・フェルリ、マルコ・ヌート、ロドヴィコ・イル・モロ、ピエロ・ソデリーニ、ローマ法王レオ10世と多くの知人を持つパチョーリは、ルネサンス期の有名な数学者であった。

イタリア・ルネサンスの歴史学者でありスイス人のヤーコブ・ブルクフルト(Jacob Burckhardt)は、15世紀末までの数学と自然科学におけるイタリアの卓越した人物として、パオロ・トスカネリそしてレオナルド・ダ・ヴィンチと並んで、パチョーリの名前をあげているのである。

また、去る1994年は「スムマ」出版500年記念の年であった。この年は、ヴェネツィアで会計士特別世界会議が開催されたのを始めとして、日本を含む世界各地でパチョーリ簿記論の公刊500周年記念の大会が開かれたのである。

(3) パチョーリ簿記論の持つ難解さ(*obscurities*)、不明瞭さ(*ambiguities*)そして神秘性(*mysterious*)である。

一般に、パチョーリは中世イタリア語で、「スムマ」を執筆したと言われている。しかし中世イタリア語とは存在していない。

カントール(Cantor)は、パチョーリは粗野なラテン語(*un cattivo latino*)と粗野なイタリア語(*un cattivo italiano*)の混合語を使用したと言う。またレオナルド・オルスキ(Leonardo Olschki)は、サン・セポルクロの方言(*dialetto di Sansepolcro*)とヴェネツィアや他のイタリアの方言の混合語を使用したと記述している。

パチョーリは、多分、ラテン語、トスカナ語、ヴェネツィア語等を使用し、さらに難解な略語を使ったのである。したがって、現代のイタリア人でも簡単に読むことができず、3冊のイタリア語による翻訳が公表される結果となったのである。

さらにパチョーリは、例題を設けず、文章のみで理論的に複式簿記を説明しようとした。その内容は、複雑であり、理解し難い個所を多く残してしまった。

例えば、第36章の終わりに示された模範例は、なぜパチョーリがこのような例題を、解説もなくいきなり持ってきたのか現在に至るも不明である。パチョーリは、本文の内容とは異なる例題を持ってきたものである。

また、パチョーリは合計試算表の解説に際し、第34章では*summa summarum*という用語を使用したのに対し、第14章と第36章では*bilancio del libro*という表現をしている。この2つの用語は同様の内容を示すものと思われる。しかし、なぜ異なった用語を採用したのかは不明である。

一般に、パチョーリは、期間計算、年度決算は解説していないとされている。しかし、第29章で「しかし、毎年締切るとはいつもよいことである」(*Ma sèpre e buono desaldare ognanno*)と記述しているのである。すなわち、パチョーリは年度決算を知っていたと解釈することが可能である。

以上述べた以外にも、パチョーリは、解釈上多くの難解なかつ不明瞭な個所を残してしまったのである。したがって、今なお、それらの個所に対する新たな解釈がなされつつあるのである。

II 30冊の翻訳書

(1) イエーゲルのドイツ語訳

エルンスト・ルードヴィッヒ・イエーゲル(Ernst Ludwig Jäger)は、ドイツのシュツットガルトの工業大学の国民経済学と簿記の私講師であった。1876年にシュツットガルトで出版した「ルカス・パチョーリとサイモン・スティーヴン」以外にも、「イタリア簿記に関する単式簿記の権利」(1868年)、「1494年のルカ・パチョーリの手形に関する論説」(1895年)、「15世紀の手形」(1895年)、「古代の銀行と手形の起源」(1881年)等の著書がある。

「ルカス・パチョーリとサイモン・スティーヴンは、全216頁4部からなり、第1部のルカス・デ・

ブルゴの3頁から106頁の中に、パチョーリ簿記論のドイツ語訳が収められている。

この文献は、カール・グスタフ・オーデルマン(Carl Gustav Odermann)博士に捧げられたものである。

ペンドルフは、「イエーゲルは、諸種の事柄で正しく翻訳しなかった。彼は諸種の追加で一連の誤りを報告した、そこで彼の翻訳は正しい注目に値する文献の前兆となった。特に、彼は、彼の文献によって、パチョーリへの興味を引き起こした。例えば、スタイグミュラーの『ルカ・パチョーリの伝記要論』は、イエーゲルの影響を受けたものである。」と記述している。

(2) ジッティのイタリア語訳

ヴィンチェンツォ・ジッティは、1878年に、トリノで「フラ・ルカ・パチョーロ、計算と記録の詳論」を出版した。この文献は142頁からなるが、そのうちの27頁から138頁に、パチョーリ簿記論のイタリア語訳を掲げた。

ジッティは、1856年にジュディツォーロ(マントヴァ)で生まれ、1945年に没している。ベスタの最初の学生であったが、その後チェルボーニの弟子になったと考えられている。上述の翻訳書以外にも、「会計の歴史」(1878年、トリノ)、「カルダーノの実用算術の翻訳」(1882年、ミラノ)等他多くの著書がある。

ジッティは、翻訳書の冒頭に、イエーゲルへの献呈の言葉を次のように述べている。「ゲーテと同じ言葉によって、このパチョーリ簿記論を最初に翻訳したイエーゲル博士に、この2番目の翻訳書を献呈する。新しい科学に最初の解明を遂行したパチョーリ、マンゾーニ、ピエトラの翻訳書に対して、イタリア人達は、心から感嘆の気持ちを持つべきである。」

ペンドルフは、このジッティのイタリア語訳に対して、「詳細な序言や多くの価値ある注釈を加えた」としながらも、「多分、ジッティの訳文は、イエーゲルの翻訳に依ったものである。……ジッティはイエーゲルに比べて翻訳は容易であった。なぜなら、ジッティは翻訳の必要がなかった。彼は、ただ1494年出版のテキストを読み易くし、その時代に合った正書法と句読法を適用するだけでよかった」と記述している。

さらに、ペンドルフはオランダの有名な会計史学者デ・ヴァール(de Wool)の「ドイツ人(=イエーゲル)による簿記論の最初の翻訳は、イタリア人(ジッティ)にとっては、目の中の刺であった」という言葉を引用している。

しかし、筆者が、パチョーリの原典、ジッティのイタリア語訳及びイエーゲルの独語訳を比較検討した結果では、ジッティの訳は、イエーゲルの訳を参照したことはあったとしても、決してイエーゲルの訳に依ったものではなく、原典から直接に訳したものであるという結論に達した。ジッティの訳は多少の誤りは見られるが、原典から現代イタリア語への、用語と句読点そして略語に関する誠実な訂正であった。

(3) ワルデンベルクのロシア語訳

第3番目の訳は、ロシア語であった。ワルデンベルク(e·G·Waldenberg)によって、1893年に、「ルカ・パチョーロ・計算と記録の詳論」(Лука Пачюло. Трактатъ о счетахъ и записяхъ. Tractatus de computis et scripturis.)が、聖ペテルスブルク(С. Петербургъ.)で出版された。

(4) カイルのチェコ語訳

カイル(Karel Petr Kheil)は、1894年にプラagueで、「ルカ・パチョーリ、1494年の計算と記録の論文」(Luka Pacioli, Traktát o účetnictví z roku 1494)というタイトルで、パチョーリ簿記論のチェコ語訳を出版した。カイルは、また1906年にはウィーンで、ベネデット・コトルリの解説と彼の簿記のドイツ語訳を出版している。

ペンドルフは「簿記史の分野では有名な研究者カイルは、イエーゲルを参照にしないで、1語一

句翻訳した、しかし彼は独自の表現を選び、独特の修正を示さず、多くのことを決定した」と記述している。

カイルの翻訳書の大きな特徴は、左側の頁に、原典から復刻した文章を現代の活字で掲げ、右側の頁にチェコ語訳を掲げたことである。この復刻された活字は、原典をそのまま印刷したゲイスバークやオーロット・ステベリンク、ブラウン・ジョンソン及びアンティノーリ等の文献とはまったく異なった意義を有する。

なお、カイルは、巻末にパチョーリが採用した略語を訂正する表を掲げている。

例えば、bñはbene(良い)、b^aoはbottega(商店)、ca^a=capitolo(章)、cō-p^aはcompagna(会社)等のそれぞれ略語である。

ステベリンクは、彼の論文「goodbye to my friend pacioli さよなら、私の友パチョーリ」(June 1994)の中で次のようにカイルについて論述している。

「スマ出版400年記念は、あまり大きな成功を収めなかった。その時は非常にわずかな会計史家だけが、活躍しただけだった。そのうちの最も重要な人物は、Carl Peter Kheilであった。彼はスマの複式簿記をチェコ語に訳したのである。この文献は、スマ出版400年を記念する1894年に出版されたものである。

カイルは、400年記念に翻訳の出版を間に合わせるために、少し急いだのである。

カイルはパチョーリの論文を読み、訳すだけで論述しないことを決意した。彼の意見ではそれが不満足だった。

(5) ヴォルマーとリンベルクのオランダ語訳

ヴォルマーとリンベルク(J. Volmer en c. von Rijnberk)の翻訳書「オランダ語に翻訳されたパチョーリ簿記論」(Paciolo's verhandeling over de koopmansboekhouding, in het Nederland overgebracht)は、1896年にロッテルダムで出版された。パチョーリ簿記論の唯一のオランダ語である。この翻訳書は、イエーゲルに献げられている。

ペンドルフは、ヴォルマー博士は、イエーゲルやジッティ等2人の先輩の誤った翻訳の表現を訂正したのみならず、基礎的事項を求め、経済生活に関する彼の綿密な知識を役立たせ、多くの部分に独自の見解を示したので、彼の翻訳は特に価値あるものになったと称賛している。

(6) バウエルのロシア語訳

バウエル(О.О.Бауэръ)は、1911年にモスクワ(МОСКВА)で、ロシア語によるパチョーリ簿記論の翻訳書『簿記史への回想』(МЕМОАРЫ КЪ ИСТОРИИ БУХГАДТЕРИИ)を出版した。これはロシア語による第2の翻訳書である。

(7) ゲイスバークの英語訳

ゲイスバーク(Jhon b. Geijsbeek)は、「伝統的複式簿記-1494年の簿記に関する最初の著者、ルカ・パチョーリの論文の復刻と翻訳、そして、マンゾーニ、ピエトラ、マイナルディ、インピン、ステイーヴン、ダフォーンノートと抜粋」(Ancient Double-Entry Bookkeeping-Lucas Pacioli's Treatise e...)をデンバーで1914年に出版した。

ゲイスバークの最大の特徴は、左側頁にパチョーリ簿記論の原典の写真版を掲げ、これに対応する英語を右側頁に掲載したことである。

さらに、副題にもあるように、マンゾーニ、ピエトラ、マッティオ・マイナルディ、インピン、ステイーヴン、リチャード・ダフォーン等の原典のコピーの一部や論文を載せたことである。

ペンドルフは、ゲイスバークの英訳書に対して、「多くの中世的表現は翻訳されていない、しかもゲイスバークは英語への訳を誤訳してしまった。もし彼がジッティやボルマーの文献を参照していたならば、もっとより良い訳ができていたであろう」と鋭い批判を加えている。

ペンドルフが誤訳の部分としてあげた一例は、第17章の[al ditto officio che cosi lo chiamano in venetia]の部分のchiamanoという単語である。これはchiamano (=呼ばれた)をchiamansと誤って記入してしまったのである。これはペンドルフの指摘が正しい。

(8) 平井泰太郎の日本語訳

1920年(大正9年)、平井泰太郎は、ゲイスベークの英語訳を日本語に訳し、「『ぱちおり簿記書』研究」として、神戸会計学会の「会計学論叢」に掲載した。後に神戸大学教授となる平井氏は、この翻訳出版の年は東京高等商業学校専攻科を卒業したばかりの24歳の若さであった。

平井氏の日本語訳はゲイスベークの英訳書を、忠実に訳出したものである。そして日本語の文章も極めて名文である。

しかし、ゲイスベークの英語訳は、上述したように、翻訳上問題となる部分が多くあった。したがって、平井訳も問題のある部分が多々あることはしかたがないことであった。

それでも、平井氏の翻訳は、日本最初のパチョーリ簿記論の翻訳として高く評価されるものである。



↑イェーナで開催された経営経済学会(1924年6月10-12日)下段:男性左から Schmidt,Nicklisch,Walb. 二段目:Geldmacher, Penndorf,Auler,Obst,Kalveram,Hellauer,Werner,Pape,Sommerfeld,Groβmann,Findeisen,Mahlberg. 三段目:Ter Veh,Banse,Pfeifer,Isaac, Malteur,Berliner,平井,Seyffert,Hummel,Röβle,Rieger,Weiβ. 四段目:Eisfeld,Leitner,Schuster.

(9) クリヴェリの英語訳

ピエトロ・クリヴェリ (Pietro Crivelli) は、1924年にロンドンで、「フラーター・ルカス・パチョーリによる複式簿記文書の論文の原典からの翻訳」(An Original Translation of the Treatise on Double-Entry Book-keeping by Frater Lucas pacioli)を出版した。

クリヴェリは、ロンドンの会計士協会(The Institute of Bookkeeper's Ltd.)の会員であった。

クリヴェリは、イエーゲル、ヴォルマー、ゲイスベーク、ジッティ等の訳本を参考文献としてあげている。クリヴェリは、序文で「翻訳はある困難を極めた、なぜなら原典には省略と方言が存在したからである、

しかしこれらの知識は私を非常に助けてくれた、そして私の仕事の成果が、偉大な人フラ・ルカス・バルトロメオ・パチョーリについて、読者にある楽しみと有益な情報を提供することを私は希

望する」と述べている。

ペンドルフは、「クリヴェリは、ゲイスベークの翻訳を参照したが、その誤りは犯さなかった」とし、クリヴェリの翻訳の良さを称賛している。確かに、クリヴェリの訳は解り易い英文で、彼が十分にパチョーリの簿記論を読みこなし、理解していたことは明白である。

(10) ラウリッヒのチェコ語訳

Historical Accounting Literatureによると、ラウリッヒ (H. Raulich) が、「フラ・ルカ・パチョーロの論文11, 計算及び記論に関する詳論」(Fura Luca Paciolo : Tractatus¹, Particularis de computis et scripturis) を、1933年にプラークで出版した。

ラウリッヒは、この中でパチョーリ簿記論のチェコ語訳を掲げた。これは、カイルに次ぐ第2のチェコ語訳である。

(11) ペンドルフのドイツ語訳

ドイツの有名な会計史学者バルドウィン・ペンドルフ (Balduin Penndorf) は、1933年にシュツットガルトで、「ルカ・パチョーリの簿記論」(Luca Pacioli Abhandlung über die Buchhaltung 1494) を出版した。

本書は3つの部分からなる。まず第1部は、14-15世紀におけるジェノヴァ、ヴェネツィア、トスカーナの会計帳簿を考察している。

最古の複式簿記帳簿については、ジーフェキングの説に依拠し、1340年のジェノヴァの財務官の元帳としている。

第2部は、パチョーリの生涯と作品について詳述している。

パチョーリの名前について、パチョーリは自らを、「ルカス・デ・ブルゴ・サンクティ・セプルクリ」と称しているが、ラテン語形式では「パチオルス」(Paciolus)であり、イタリア語形式では、「パチオーロ」(Paciolo)であり、トスカーナ語形式では、「パチョーリ」(Pacioli)であり、現在では、「ルカ・パチョーリ」が正しいと解説している。

なお、「パチョーリは簿記論の著者であるのか」(Ist Pacioli Verfasser der Abhandlung)の章では、ベスタ及びヴィアネッロの剽窃論を紹介する。そして、最後にベスタは何も証拠を提出し得なかったとして、ベスタの意見を否定している。

第3部で、パチョーリ簿記論のドイツ語訳を掲げている。この訳は、正確かつ権威あるものと言われている。

ペンドルフは、当然のことながら、パチョーリ簿記論の原典を基に翻訳を完成させたが、ドイツ語による最初の翻訳者イエーゲルの翻訳も十分に参照している。ペンドルフは著者の序文で次のように記述している。

「私は、私の著書執筆に際し、イエーゲルの翻訳書をも基礎に置いたが、パチョーリの原典を基に、完全に新しい翻訳に着手した。特別な成果と同様に、1876年(イエーゲルの文献の出版年度)以来の研究を前進させたが、その一部はイタリアで遂行された研究を使用した。」

(12) 陸善熾の中国語訳

陸善熾は、「巴舒里『計算興記録要論』漢訳」というタイトルで、1935年(昭和10年、上海・中華民国24年)に出版している。この中国語による訳書は、平井泰太郎氏の「ばちおり簿記書研究」の日本語を中国語に訳したものである。

その後、天津南開大学丁佑教授が、ゲイスベークの英訳本から、直接に中国語へ訳したと言われている(小島男佐夫『簿記史』森山書店、35~36頁参照)。

なお、陸氏は、京都大学の図書館で平井氏の訳書を発見し、パチョーリ簿記論の価値の大きさを知り、日本語から中国語へ翻訳する決意をしたということを序文で述べている。

(13) マルセル・シェフスのポーランド語訳

1939年、マルセル・シェフス(Marcel Scheffs)は、「ルカ・パチョーリの会計史」(Z historii księgowosci...)をポズナニ(Poznań)で出版した。世界最初の、唯一のポーランド語訳である。

主要内容は、古代の会計、イタリアの単式簿記、イタリアの複式簿記、ルカ・パチョーリの人物、パチョーリ簿記論の翻訳、パチョーリ以後の簿記、貸借対照表の歴史、ポーランドにおける商業史の歴史他等からなる。

マルセルは、彼の著書の序文で、簿記史に関する外国の文献は極めて多いが、ポーランドでは、ほとんどないと嘆いている。

そして、パチョーリの「スムマ」出版後に発表された文献の著書として、イタリアのコトルリ(1458年)、マンツォーニ(1534年)、カルダーノ(1539年)、ファンタナ(1551年)、カサノヴァ(1558年)、ピエトラ(1586年)、モスケッティ(1610年)、フローリ(1636年)、フランドルのインピン(1543年)、とメンハー(1550年)、イギリスのオールドカースル(1543年)、とダフォルネ(1634年)、ドイツのシュヴァイケル(1549年)、等の名前をあげている。

さらに、「パチョーリ簿記論」の翻訳者として、ドイツのイーゲルとペンドルフ、イタリアのジッテイ、チェコのカイル、オランダのヴェルマーとリンベルク、ロシアのワルデンベルグ、バラツ (Barac, 1905年)、イヴァノフ (Iranov 1910年)、バウエルそしてガラガン (Galagan 1914年)、アメリカのゲイスベーク、イギリスのクリヴェリそして日本の平井泰太郎等の名前をあげている。

(14) 片岡義雄の日本語訳

片岡義雄は、1956年(昭和31年)に、「パチョーリ『簿記論』の研究」を森山書店から出版している。

本書は、第1部ルカ・パチョーリの生涯、第2部ルカ・パチョーリの「簿記論」、第3部ルカ・パチョーリ「簿記論」の批判、第4部(I)イタリアにおける複式簿記の成立 (II)中世イタリアにおける工業簿記の先駆等の4部からなる。

第2部が、簿記論の全訳であるが、これはゲイスベーク、クリヴェリ、ペンドルフ等の比較研究の上になされた日本語訳である。

(15) ブラウンとジョンストンの英語訳

ブラウン(R.G.Brown)とジョンストン(K.s.Johnston)は、1963年に「パチョーロの会計」(Paciolo on Accounting)を出版した。

第1章が、パチョーリの人物と作品、第2章が簿記論の翻訳、第3章が原典の簿記論の部分コピーである。

ブラウンとジョンストンは、序文の中で「20世紀に入ってパチョーロの2冊の訳文が存在した、1冊は1924年のクリヴェリのものであり、もう1冊は1914年のゲイスベークのものである。ゲイスベークは、より読み易い訳文を作成することを試みたが、クリヴェリは原文を忠実に訳すことを試みている。我々の訳は、現代の英語を使用し、ある古い不明瞭さを明確にすることを試みている」と記述している。

しかし、その試みは成功しなかった。なぜなら、読者に分らせようと努力し過ぎたため、原文から大きく離れてしまい、その英語訳は省略と誤訳を多く含んでしまったのである。クリヴェリはもちろんのことゲイスベークよりも劣る訳文になってしまった。

(16) ジョルジョ・ベルニとラモン・カルデナスのスペイン語訳

ジョルジョ・ベルニとラモン・カルデナス(Giorgio Berni y Ramon Cardenas)は、1962年にメキシコで「複式簿記による計算と記録・・・」(de las Cuentas y la Escria...)を出版した。パチョーリ

簿記論の最初のスペイン語訳である。第2版が1991年に出版されている。

主たる内容は、パチョーリの伝記、パチョーリの名前について、文献目録、パチョーリの簿記論の翻訳(5頁~134頁)、スママ原典第二版のファクシミリ他等からなる。

(17) ヴァーレとアロエのポルトガル語訳

1966年に、ヴァーレとアロエ(Valle, Fe Aloe, A)は、ブラジルのサン・パウロで「フラ・ルカ・パチョーリと彼の簿記論」(Fra Luca Pacioli e seu tratado de Escrituração de Contas)を出版した。最初のポルトガル語訳である。

主要な内容は、パチョーリと彼の作品(19頁~86頁)、文献目録(87頁~92頁)、パチョーリ簿記論の翻訳(97頁~169頁)、ノートとコメント(173頁~196頁)等からなる。

(18) ソコロフのロシア語訳

ヤスコラーフ・ソコロフ(Я р о с л а в С о к о л о в)は、1974年にモスクワで、ルカ・パチョーリ(ЛУКА ПАЧОЛИ, ТРАКТАТ О СЧЕТАХ И ЗАПИСЯХ)を出版した。

ワルベンベルク・バウエルに次ぐ第3のロシア語訳である。このように、パチョーリ簿記論のロシア語訳が3冊も出版されたことは、驚くべきことと言よう。

(19) オーロットとステベリンクのフランス語訳

ロベール・オーロット(Robert Haulotte)とエルネスト・ステベリンク(Ernest Stevelinck)は、「ルカ・パチョーリ、彼の人生、彼の作品」(Luca Pacioli, Sa vie, Son œuvre)を1975年にブリュッセルで出版した。

世界最初のパチョーリ簿記論のフランス語訳である。306頁に及びぶ大冊は、3部からなる。

第1部はパチョーリの伝記と作品である。パチョーリの肖像、絵、記念碑等の多くの写真が掲載されている。

第2部はスママの簿記論の部分のコピーが載せられている。コピーには、第1版の同頁ながら異なる3種類の版、第1版とは異なる第2版の最初の頁等が含まれている。

第3部は簿記論のフランス語訳である。フランス語に最初の翻訳(Pre-mière traduction en français)であると自ら記述している。

オーロットとステベリンクは、序文の中で次のように述べている。

「パチョーリは、時にはあるものから、また時には他のものから着想を得た。彼の根本思想は、他の様々な文献から借りてきたものである。確かに、パチョーリは数学的感覚を持っていた。しかしスママは急に出来たものではない。彼は多くの文献や幾冊かの非常に古いマニスクリプトをゆっくり調べる機会を持っていたのである。そして高い業績のあった人々、例えばピエロ・デラ・フランチェスカ、レオン・バッテスタ・アルベルティ、レオナルド・ダ・ヴィンチ他多くの有名な人々に囲まれるという機会を有していた。彼独特の才能は、広大な知識を自分のものにするか、物事の明白な視覚を身につけることを可能にしたのである。

幸いなことに、印刷術の発明は、パチョーリの著書を普及させ、大きな図書館の棚の中で、我々の時代にまで保管させることに役立ったのである。しかし、1514年以後、ルカ・パチョーリの足取りは消える。この偉大な編集者 (grand compilateur) は、彼の魂を神に返した後、彼の作品とともに忘却の彼方に消え去る。ただ何人かの数学者の大家達だけが、その著書を知り、時々、その本を繙いたのである。しかし、それは、ほぼ大きな静寂だった。一途中省略—その後、1869年、ミラノの会計学会 (L'Académie de comptabilité de Milan) でルッチーニ (Lucchini) 教授は聴衆に向かって、「スママ」について話しかけた。そして、「スママ」の中に「簿記論」の章があることを、会計学徒に注目させた。ルカ・パチョーリは、その時代の会計学徒に知られてはいなかった。

したがって、人々は有名な先駆者（パチョーリ）が、1500年以前に1冊の本を出版させたことを知ったのである。そして、その本は、複式簿記の理論と同様に、イタリアの会計学（comptabilite italienne）と呼ばれるようになった。」

さらに、ステベリンクは、goodbye to my friend pacioli(1994. 6月)の冒頭で次のような内容を述べている。

私は、パチョーリについて何も聞くことなく、会計を学んだ。私は講師から会計の先人達の生涯とその作品についての話を聞くことを楽しみにしていた。しかし、講師は後に会計の父と呼ばれる人物を知らなかった。

やがて、第2次世界大戦は私に多くの時間を与えてくれた。私は会計とその歴史を学び、ついには会計史を学び、パチョーリに興味を持つようになった。

敵意が無くなった後、私は会計史に多くの興味を持っていたRobert Haulotteと出会った。我々は何回も、夜電話で話している間に、パチョーリの生涯と作品について出版する約束をした。

後に、私はDivinaをフランス訳した画家であるフランス人Mademoiselle Sarradeと知り合い、手紙の交換をした。しかし、現在パチョーリに関する2人の友人は、この世にいない。Sarradeは1987年1月8日に、

Haulotteは同年の10月6日になくなった。パチョーリ「スママ」出版500年記念を祝う3人のうち、私一人だけが残されてしまった。

(20) デゥミトルとステファンのルーマニア語訳

デゥミトルとステファン(Dumitru Rusu and Stefan Cuciureanu)は、1891年に「ルカ・パチオロー複式簿記論 (Luca Paciolo-Tratat de Contabilitate in Partida Dubla) を出版した。世界最初のルーマニア語訳である。

主な内容は、パチョーリ以後の会計の発展、ルーマニアにおける会計思想の出発、論文の形式と言葉についての考察、スママ第2版原典の簿記論のファクシミリ、簿記論の翻訳(94頁～164頁)近代イタリアの会計の論文と目録、スママ最後の頁のファクシミリと翻訳、論文中の特殊な用語と近代イタリア語訳、論文中の略語とその意味の用語集他等である。

(21) 岸悦三教授の日本語訳

岸教授は、1983年(昭和58年)に「会計前史」を同文館から出版した。本書は、第1部-パチョーリ簿記論の解明、第2部-代理人会計の展開、の2つの部からなる。

そして第1部の第4章37頁～123頁にわたり、パチョーリ簿記論の原典からの日本語訳を掲げた。

岸教授は、代理人会計を基調とする古代以来の簿記発展史のある段階で、開花したものが所有主会計の簿記であり、この簿記を論述した人こそパチョーリであると主張している。

岸教授は、我が国を代表をする会計史の研究者であり、ヨーロッパ会計史に関する多くの論文を発表している。

(22) 片岡泰彦の日本語訳

片岡泰彦は、1988年(昭和63年)に「イタリア簿記史論」を森山書店から出版した。本書は、第1部-実践簿記の生成、第2部-パチョーリ簿記論-理論簿記の成立、第3部-簿記文献への発展-理論簿記の例証、からなる。

そして第2部の第7章の中で、パチョーリ簿記論の原典から日本語訳への翻訳を遂行している

(23) 林志軍、李若山、李松玉の中国語訳

1988年に上海で、廈門大学の林志軍、李若山、李松玉の3人は、パチョーリ簿記論の中国語による翻訳書を出版した。

この中国語訳は、ブラウンとジョンストンの英語訳からの翻訳である。前述したように、ブラウンとジョンストンの訳は多くの誤訳を含んでいる。したがって、この中国語訳も問題ある訳と思われる。

この翻訳書への推薦文を執筆した葛家樹は、「パチョーリ簿記論」は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、日本語及びイタリア語に翻訳された。そしてこの簿記論は世界中に広まったのである。しかし中国では、いまだしっかりとした訳書がなかった。

中国の会計の世界では、このパチョーリの名前とパチョーリが論述した「簿記論」のこと、そしてまた1494年が会計史上、重要な年であることも十分に知っている。しかし、会計の研究者達は、「このパチョーリの本を読む機会がない。それは極めて残念なことと言わざるを得ない。」と述べている。

(24) アンティノーリのイタリア語訳

現代イタリアを代表する会計史学者カルロ・アンティノーリ(Carlo Antinori)は、「ルカ・パチョーリとスムマ」(Luca Pacioli, e la Summa de Arithmetica)を、1994年にローマで出版した。この文献は、パチョーリの「スムマ」出版500年の記念行事の一つとして公刊されたものである。

本書は、まずルカ・パチョーリの伝記とスムマの解説が述べられている。この中で特に重要なのは、スムマ第1部第9編の第1章から第12章までの概要の説明である。パチョーリが、第11章の簿記論(=計算と記録の章)を執筆するうえで、所有していた商業上の知識を、この第9編全体で知ることができるのである。

次のパチョーリ簿記論のイタリア語訳は、左側の頁に原典のコピーが、右側の頁に原文に対応する現代イタリア語訳が掲げられている。

アンティノーリのイタリア語訳は、ジッティのものとは異なる。ジッティが単に語順を代えることなく、略語や方言を現代のイタリア語に置き代えただけなのに対し、アンティノーリは現代のイタリア語へ、本格的に訳し直したものである。

最後に、パチョーリと関係の深いヴェネツィアとサンセポルクロの写真と解説とが掲げられている。

(25)(26) コンテリオによるイタリア語訳とゲブサッテルによる英語訳

パチョーリ「スムマ」出版500年を記念して、1994年にヴェネツィアでイタリア語と英語による2冊の文献が出版された。

イタリア語による文献のタイトルは、「ルカ・パチョーリ、複式簿記論」(Luca Pacioli, trattato di Partita Doppia)である。

本書は、パチョーリ委員会会長トマシン(G.Tomasin)の序文、B.S.ヤーメイによるパチョーリの解説と簿記論批評のイタリア語訳、ベローニ(G.Belloni)による「スムマ」における言語上の研究ノート、コンテリオ(Annalisa Conterio)による簿記論とその歴史への研究ノート、コンテリオによる簿記論のイタリア語訳、ヤーメイによるパチョーリ簿記論各章へのコメントのイタリア語訳、コンテリオによる索引等からなる。

英語版のタイトルは、イタリア語版と同じく、「ルカ・パチョーリ、複式簿記論」(Exposition of Double Entry Bookkeeping)である。

本書は、ヤーメイによる序文、ヤーメイによるパチョーリの解説と簿記論批判、ゲブサッテル(A. von Gebattel)による簿記論の英語訳、ヤーメイによるパチョーリ簿記論各章へのコメントの英語版等からなる。

このイタリア語版と英語版は、ヤーメイの論文のように、内容上完全に一致している部分もある。また一方、トマシンの序文、コンテリオの研究ノート等は、イタリア語版しかなく、一致していない部分もある。

コンテリオによるイタリア語訳は、ジッティの訳を参照したものと思われ、原文の省略や方言を現代イタリア語へ易しく置き代えたものである。

ゲブサッテルによる英語訳は、易しく英語で読む入門書としては適している。しかし易しくするために、原文の難解な個所を省略した部分もある。完全な翻訳からは遠のいてしまった感がある。

また、原文の36章を、36章以外に37章、38章と3つの章に分類したことは、着想としてはよいが賛成できない。

(27) エステバンによるスペイン語訳

エステバン・ヘルナンデス・エステヴェ(Esteban Hernández Esteve)は、1994年にマドリッドで、『ルカ・パチョーリ、計算と記録』(Luca Pacioli, de Las Cuentas Y Las Escrituras)を出版した。

エステバンは、イスパニア銀行(Banco de España)に勤務する実務家である。しかし、会計史世界会議に出席し、毎回研究報告も実行している学者である。会計史に関する多数の論文もある。

この文献は、3部からなる。第1部は、ルカ・パチョーリの生涯と著者についての研究的紹介である。これは、序文、ルカ・パチョーリの生涯と環境、パチョーリの著書からなる。さらにパチョーリ生涯と環境では、誕生と家庭環境、研究と教育、円熟期の時代、死亡についてが詳述されている。

そして、パチョーリの著書については、著書一般、「ディヴィナ・ポロポルチオーネ」、「スママ」、「スママ簿記論」剽窃論、オリジナルの欠如、パチョーリ簿記論の翻訳書、引用文献等が記述されている。

翻訳書の紹介では、イエーゲル、ジッティ、ゲイスベーク、クリベリ、ブラウン&ジョンストン、オーロット・ステベリンク、アンティノーリ等と並んで、2冊の翻訳書が紹介されている。1冊は、1966年にブラジルで出版されたフランチェスコ・ヴァレー(Francesco Valle)とアルマンド・アローエ(Arumando Aloe)によるポルトガル語による翻訳書である。そしてもう1冊は、1962年にメキシコ人のジルジオ・ベルーニ(Giorgio Berni)とラモン・カルデナス(Ramón Cárdenas)によるスペイン語の翻訳が完成されているようである。

第2部は、ルカ・パチョーリ簿記論の翻訳である。そして最後の第3部では、簿記論のコピーが掲げられている。

エステバンは、彼の論文「パチョーリ簿記論の不明瞭な諸点についての意見」の中で、多くの疑問点とそれに対する彼の見解を述べている。

彼の意見によると、この第9編第10章の論文は、同目的、同時に執筆されたものではなく、完全に異なる2つの部分に分類されると言うのである。第1部は35章までのもので、もう一部は36章の部分である。

そして、最後の簿記の例題の貨幣単位であるリレ、ゾルディ、デナリイはフィレンツェの会計士によって使用されていたものである。そして36章は、簿記の要約を示すものである。

(28) Oktayによるトルコ語訳

1994年、Oktay Güvemliによって、ルカ・パチョーリ簿記論のトルコによる翻訳書(Luca Pacioli re Muhasebenin 500. Yılı)が、イスタンブールで出版されている。

(29) オーロットとステベリンクによるオランダ語訳

(19)で既述したフランス語最初の翻訳者、オーロットとステベリンクは、1994年にブリュッセルで、『ルカ・パチョーリ、1494-1994. スママ・・・』Luca Pacioli, 1494-1994. Summa de Arithmetica・・・を出版した。これはフランス語訳からオランダ語へ翻訳したものである。

(30) ピエール・ジャンニクのフランス語訳

1995年、ピエール・ジャンニク (Piere Jouanique) はパリで「ルカ・パチョーリ、計算と記録の論文、近代的会計への幕開け」(Luca Pacioli, *Traité des Comptes et des Écritures, ouverture vers la comptabilité moderne*, Paris, 1995) を出版した。パチョーリ簿記論の第2のフランス語訳である。

内容は、パチョーリの時代、ルカ・パチョーリの人生と作品、スムマの分析、原文と翻訳(についての著者の言葉)、パチョーリ簿記論のフランス語訳等からなる。

この文献の特徴は、左頁に現代の活字に復刻したパチョーリのイタリア語を掲げ、右側の頁にフランス語訳を掲げたことである。

III 結

複式簿記起源論は、古代ローマ起源説と中世イタリア起源説という2つの意見が対立している。しかし、一般的には、複式簿記は、14-15世紀の中世イタリアの都市国家で生成したものと考えられている。

世界で最初の複式簿記文献は、ルカ・パチョーリの「スムマ」であるが、世界で最初に執筆された複式簿記の原稿は、1458年のラグーサ出身のベネデット・コトルリ (raguseo Benedetto Cotrugli) による「商業技術の本」(libro dell' arte du' mercatura) である。しかし、この原稿は出版されず、執筆後115年たった1573年に、「商業技術と完全な商人」(Della mercatura et del mercante perfetto) という題で出版された。ただし、この原稿には、1484年3月に1冊の写本が作成されていたことが確認されている。

しかし、このコトルリの解説の内容はパチョーリに比べると、量も少なく、不十分であり、その後の世界に与えた影響も微々たるものである。

「パチョーリ簿記論」は、当時のヴェネツィアやフィレンツェで採用されていた複式簿記を十分に参照し、解説したものである。この「パチョーリ簿記論」は、前述したように、16世紀以降、イタリアはもちろんフランス、イギリス、オランダそしてドイツと全ヨーロッパへ広まっていった。その解説もそれぞれの各国の言葉によってなされた。

ただし、それは直接の翻訳書としてではなく、複式簿記の解説書として、十分に改良が加えられ、それぞれ出版された。すなわち、多くの執筆者達が、パチョーリ簿記論を、実務的のみならず理論的にも発展させたのである。

そして上述したように、1876年以降、パチョーリ簿記論は、世界各国の言葉に翻訳・出版された。出版された翻訳書の数は30冊、訳された言葉は14に及びんでいる。

特に、1994年の「スムマ」出版500年を記念して、なんと7冊の翻訳書が出版されたのである。さらに、ヘルムとポストマによると、何冊かの翻訳書が、その後も出版され、また出版の予定である。

例えば、カルカッタに住むAsokがベンガル語による翻訳書を出版したそうである。そして、ヘルムとポストマによるオランダ語訳も近年中に刊行の予定である。ただし、クリップス (Jeremy Cripps) によるパチョーリ簿記論の英訳が、1993年にシアトルで出版されているが、これは全訳ではなく、要約なのでここでは省略した。

そして、まだまだ翻訳されていない重要な言語が沢山ある。例えば、デンマーク語、スウェーデン語、アラビア語そして韓国語等である。将来、これらの言葉に翻訳される可能性は十分あるように思われる。

500年以上前に出版された「パチョーリ簿記論」は、遠い歴史の中に存在した文献としてではなく、新しい歴史を作り出す文献として、我々の前に、今なお聳え立っているのである。

[平成8年12月21日の第9回パチョーリ・ソサエティにおいて報告された原稿に加筆したものです(当日の司会は後公認会計士・岩井敏先生にお願いしました。)。文中活字が無いため当て字で代用した外国語があります。]